

# 岬之町だより

## 第3回「お札の中の下関」

日本銀行 下関支店長 岩下 直行

今回は、日銀らしく、お札の話をした  
いと思う。これまでにお札（日銀券）の  
肖像に描かれた歴史上の人物の中で、下  
関にゆかりの地を持つ人は三人いる。不  
思議なことにそれらの史跡は、岬之町の  
日銀下関支店からほど近い、南部町（な  
べちよう）の西側に集中している。現在、  
市役所が建つ南部町の高台は、室町時代  
に、豪族厚東氏（こうとうし）によって南  
部城（なべじょう）という山城が築かれ  
た地だ。長い歴史を持つこの南部町を中  
心に、お札になった先人三人の史跡を訪  
ねて下関を歩いてみることにしよう。



五円券（1943年発行）  
日本銀行貨幣博物館所蔵

その一人目は、戦前の五円札や二十円  
札に肖像が使用された菅原道真、つまり  
天神様である。道真公は幼少から詩歌に

才能を発揮し、その学識をもって宇多天  
皇の信任を受け、従二位・右大臣にまで  
昇進したが、讒言（ざんげん）により大  
宰権帥（だざいのごんのそつ）に左遷さ  
れ、九〇三年、太宰府で死去している。  
山口県で道真公ゆかりの地といえれば防  
府天満宮が有名だ。道真公の祟りを恐れ  
た朝廷が、九四七年に京都の北野天満宮  
を建立し、その後全国各地に天満宮が建  
てられたのだが、実は防府天満宮の縁起  
は北野天満宮よりもなお古い。当事、防  
府にいた周防国司、土師信貞（はじのぶ  
さだ）は道真公と同族であったため、朝  
廷よりも早く道真公の御霊を祀り、その  
社が防府天満宮となったからだという。

防府は周防の国府だが、長門側にも天  
神様を祀る神社がある。そのひとつが南  
部町は専念寺の隣にある菅原神社だ。防  
府天満宮の周防天神に対して、俗に長門  
天神と呼ばれるこの神社の由緒によれ  
ば、十世紀末、正暦（しょうりやく）年  
中に建立されたらしい。社殿の規模から  
みても特段大きな神社ではない。むしろ、  
同じ社殿に合祀されている恵比寿神社の  
方が有名かもしれない。毎年二月九日の  
「ふくの日」に、この神社でフク祈願祭  
が行われ、下関ふく連盟が大きなトラフ  
グをお供えするからである。  
菅原神社の境内の南端に小さな石灯籠  
と植え込みがあり、その根元に大きな岩  
が半ば埋まっている。横にある石碑には  
「菅公腰掛石（かんこうこしかけいし）」

の文字がある。今を去る千百年前、道  
真公が太宰府に流されていく際に、下関  
に立ち寄り、この石に腰を掛けて歌を詠  
んだのだという。このため、この神社の  
ある辺りを眺詠山（ぎょうえいざん）と  
呼ぶ。伝説の類と考えるべき話だが、こ  
の腰掛石の辺りからは関門海峡の景色が  
きれいに見通せる。当時は周囲に家もな  
く、見晴らしは今よりも更に良かったは  
ずだから、道真公でなくても歌のひとつ  
も詠みたくなる風景だったことだろう。  
商工会議所から歩いてすぐにあるこの史  
跡が、下関における道真公ゆかりの地で  
ある。

二人目は、一九六三年発行の千円札に  
肖像が使用された伊藤博文である。初代  
を含めて四回も内閣総理大臣を務めた大  
物だ。出身地は山口県光市。後に萩に移  
り住んで松下村塾で学び、長州ファイブ  
の一人としてひそかに英国に留学した  
が、欧米列強による下関攻撃が計画され  
ていることを知り、一八六四年六月、急  
ぎ帰国する。彼が下関で活躍するようにな  
るのはその頃からだ。  
当時の長州藩は、幕府とも対立し、朝  
廷からは見放され、欧米列強にも戦いを  
仕掛けるなど、まさに四面楚歌の状況に  
あった。僅か半年間の見聞ではあるが、  
欧州の文化に触れ、攘夷の無理を悟った  
博文は、高杉晋作、井上馨とともに、戦  
いを止めようと藩首脳を必死で説得し、



C 千円券 (1963年発行)  
出典：日本銀行「お金の話あれこれ」

四万國艦隊の下関砲撃後には停戦交渉に尽力した。

当時の記録を読むと、晋作にしる博文にしる、よく生き残ることができたものだと思ふ。彼らにとつての脅威は、むしろ身内にあつた。欧米列強との停戦交渉を進めようとするのは弱腰とみなされ、味方に斬られそうになる。下関を萩本藩の管轄とした上で開港し、欧米との貿易で富国強兵を図るといふ構想は、攘夷という思想と相容れず、かつ下関の権益が奪われることへの支藩の抵抗もあり、命を狙われる日々が続く。

そんなある日、博文は、下関の亀山八幡宮境内で刺客に襲われた。その時、茶店のお茶子が博文をこみ溜めにかくま

い、その上に座つて刺客をやり過ごし、博文の命を救つた。このお茶子が、後に博文の夫人となる木田梅子である。この事件は、一八六五年春頃のこととされる。南部町にある寿公園横のマンシヨンの外壁に、「伊藤博文公夫妻史蹟・梅子夫人の実家跡」という石碑が建てられており、そこに二人の馴れ初めや当時の様子が書かれている。この頃、博文が潜伏していた紅屋喜八の家の土蔵も、このすぐ近くにあつたという。

その後、博文は萩で暮らしていた妻を離縁し、一八六六年春、梅子を正妻として迎え入れる。博文が梅子と新婚生活を過ごしたのは、現在の田中町、名池の井戸の近くであつた。博文は国事に奔走し、各地を転々としていたが、梅子夫人は下関に在留のまま、二人の娘を産み育てている。

一八六八年(明治元年)、博文は初代兵庫県知事に任ぜられ、家族ともども下関を離れた。それで降、博文が下関に戻つてきた記録は何回かあるが、最大のイベントは下関条約(日清講和条約)の締結交渉であろう。春帆楼前の日清講和記念館には博文の書や条約への署名が飾られ、館外には博文と陸奥宗光の胸像が置かれている。

司馬遼太郎の「世に棲む日々」に、博文がその晩年に下関を訪れた際のエピソードが書かれている。博文は、下関の酒席で芸者が歌う唄を聞き、それがかつ

て博文と晋作が下関で遊んだ際に晋作が即興で作つた唄だったことに気が付いた。下関では、晋作が作つたことは忘れられて、唄だけが残っていたのだ。博文はその唄を再び歌わせ、往時を思い出し涙をうかべたという。

三人目は、一九五一年発行の五十円札に肖像が使用された高橋是清である。日銀総裁を経て総理大臣、大蔵大臣を務め、金融恐慌から経済を立て直すために奮闘したが、一九三六年、二・二六事件で暗殺された。

是清は、一八九三年、新設された日銀西部支店の初代支店長として下関に赴任した。一八九五年まで下関に勤務し、そ

の後東京に戻っている。この間の経験が「高橋是清自伝」に詳しく書かれているので、我々は当時の彼の活動内容を知ることが出来る。

当時、是清が勤めていた日銀西部支店は、「赤間関市西南部町五二番の一」にあつた。これは現在の南部町にある明治安田生命下関ビルの辺りである。ただし、前記の二人と違って、是清のゆかりの地を示す案内や石碑は置かれていない。また、当時、是清がどこに住居を置いていたのかも記録に残されていない。

道真公が太宰府に下る途中で下関に立ち寄つたのは、ほんの僅かな日数であつたと思われる。博文は一時期、下関に居を構えてはいたものの留守がちで、下関で過ごした時間がそう長かつたとも考えにくい。

これに対し、是清は、正味一年十カ月、下関に在任し、かつ支店長は任地を離れないのが原則なので、三人の中では多分最も長い時間を下関で過ごしたと思われる。また、自伝に下関でのエピソードを数多く書き残しているのが、正確な情報が残っている。そんな是清の下関での活動は、地元でもっと広く知られても良いと思う。そうならないのは、是清が去つた後、日銀が一旦下関を離れてしまったことと無関係ではないだろう。次回、このことをとりあげてみたい。



B 五十円券 (1951年発行)  
出典：日本銀行「お金の話あれこれ」